【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	山 形 県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	立川町立立川中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	3	2	9	１６
生徒数	６４	６６	８６	2	２１８	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学びをはぐくむ学校づくり　」

学びを通して人を育て、確かな学力の学校をめざす

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・１．２．３学年　　数学　・　英語

・生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。
・これまでの研究成果と生徒の実態から、実施学年・教科の枠を広げ、研究に取り組むため。

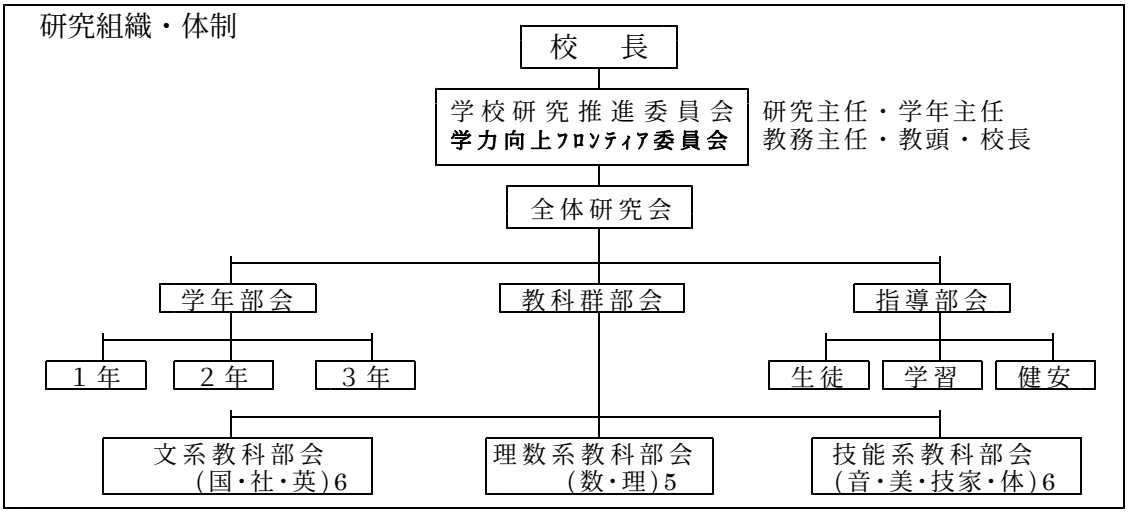
(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ　：　確かな学びをはぐくむ学校づくり 学びを通して人を育て、高い学力の学校をめざす ○仮　説 ①生徒と生徒、生徒と教師の心の交流を深め合い、きちんとした学習規律や学習習慣を身に付けさせながら学級・教科経営を行うことで、学習の基礎・基本や確かな学習内容を生徒一人ひとりに定着させることになるだろう。 ②教師が授業改善を目指し、「生徒一人ひとりがわかる授業」を仕組むことで確かな学びを育む学校へと変容するだろう。 ○研究内容・方法 ①本校では平成１３年度から全学年で数学をＴＴで学習を行ってきたが、これらの成果を踏まえ、さらに生徒の理解や習熟の程度に応じたきめ細やかな指導に取り組むため、平成１４年度7月からは3年数学において習熟度別に少人数クラスを編成した。 また、学びを通して人を育てるということは、「知ることを学ぶ」、「人として生きることを学ぶ」、「人間性を学ぶ」、つまり、「子どもを人間として育てる」ということでもあると考え。そのために、学ぶ目的や何のために学ぶのかを示しながら、生徒に学ぼうとする意欲と基礎・基本を身に付けさせることを第一と考え、ＣＴの時間の確保、一斉指導、個別指導、ＴＴによる指導、習熟度別学習による指導など指導形態や指導体制の効果的な使い分けを探り、これまでの指導を見直し授業の改善に取り組んできた。 ②・習熟度別学習など時代や社会の求めに応じた指導法の在り方を探りながらも、子どもたちに「生きる力」としての「学力」を確実に身に付けさせるためには、まず教師自身が「教える工夫」を深め「教える意欲」を常に高めていかなければならない。そんな教師の意気込みが生徒にも伝わり、学校全体が学習する雰囲気に満ちてくるとも考えている。

平成15年度	○テーマ　：　　確かな学びをはぐくむ学校づくり あらゆる教育活動を通して人を育て、高い学力の学校をめざす ○仮　説 ①生徒と生徒、生徒と教師の心の交流を深め合い、きちんとした学習規律や学習習慣を身に付けさせながら学級・教科経営を行うことで、学習の基礎・基本や確かな学習内容を生徒一人ひとりに定着させることになるだろう。 ②教師が授業改善を目指し、生徒一人ひとりが「伸びる喜び」が感じられる授業を仕組むことで確かな学びを育む学校へと変容するだろう。 ○研究内容・方法 ①深度差、補教、クラス編成のさらなる工夫、教材開発の工夫が必要等の初年度の反省を生かしながら、さらに一人一人に基礎・基本の内容の確実な習得を図るために、どの教科も「繰り返しの指導」と「個に応じた指導」を年間授業時数の１割程度の時数（教科で１０時間程度）を指導に充てる。 ②絶対評価に関わる取り組み、観点別学習状況の評価の４観点（国語５）の内、「関心・意欲・態度」に関わる評価については、可能な限り時間を割いて検討し各教科とも共通理解を図り指導に生かす。 ③通常の学級への所属意識の希薄化を招かないようにするためにも、指導・評価計画の作成や、教材の収集、開発は当該学年と教科に所属している教員が協力して行う。習熟度別学級編成は数学と英語に限りながらも、個に応じた指導方法の工夫、評価、体制、教材収集等は全ての教科で行う。

平成16年度	○テーマ　：　　確かな学びをはぐくむ学校づくり あらゆる教育活動を通して人を育て、高い学力の学校をめざす ○仮　説 ①生徒と生徒、生徒と教師の心の交流を深め合い、きちんとした学習規律や学習習慣を身に付けさせながら学級・教科経営を行うことで、学習の基礎・基本や確かな学習内容を生徒一人ひとりに定着させることになるだろう。 ②教師が授業改善を目指し、生徒一人ひとりが「伸びる喜び」が感じられる授業を仕組むことで確かな学びを育む学校へと変容するだろう。 ○研究内容・方法 ①一斉学習、TT学習、習熟度別学習など学び合う集団づくりを計る。 ②習熟の程度や興味・関心に応じた授業を進める上での、必要な教材の収集・開発を行う。 ③習熟度別学習集団による学習の効果をどのような方法で評価するか検討する。 ＊上記三項目の質の転換を図る。教師の力量を高める。「一人一人のつぶやきが拾える」「生徒の考えに共感できる」また、どんな時にどんなふうに寄り添えばいいのか体得できる教師になり、道徳・学活を含め全ての教科、あらゆる教育活動において「わかる喜び」から「伸びる喜び」が感じられるような学校研究にする。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

①例として、第二学年数学の絶対評価による一学期の評定平均は 3.35、二学期は 3.38、同様に第三学年英語については、一学期 3.19、二学期は 3.33 と向上している様子がうかがえる。
②習熟度別学習では，特に基礎コースの生徒の評価が高く「分かるまで教えてもらえるのがうれしい」「分かりやすい」「発表しやすい」などが挙げられた。
③少人数指導の場面では生徒の緊張感が高まり意欲的に授業に参加している。学習形態の変化も意欲向上につながった。
④少人数学習により自己表現の積極性や気軽な質問，自己評価カードへの記入など意欲的になっている。
⑤担当教師間の意志疎通や情報交換が頻繁になり，より多面的な視点から生徒を見つめることができるようになった。

２．今後の課題

①学年２～３コースでの習熟度別学習では充実・発展コースの人数が多くなり，コース内の個人差が拡大したので、さらなる指導の工夫を余儀なくされている。理想的なコース数での実施が望まれるが教員配置や教室確保などの面から実現はかなり難しい。
②学級をオープンにしたコース編成をすると、本来の親学級が持っている特徴や人間関係上の良い面を生かしにくいことがあり得る。
③教員配置の関係から少人数指導・TT での指導において他教科の教員が担当すると，指導内容の理解や指導技術に不十分な点があり，習熟度別指導の意図した効果を十分に発揮させにくい原因になっている。
④英語の発展コースでは，自分のペースで学習を進められるが、コミュニケーション活動が少なくなってしまう。
⑤英語の習熟度別指導では指導者をローテーションしているが，特に基礎コースの生徒にとっては固定化した方が望ましいと思われる。また，コミュニケーション活動における評価に関しても，指導に生かす評価のあり方をさらに深めていきたい。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

①　標準学力調査の実施（各学年：年１回）２学年は知能検査も実施
②　定期的な学力テスト（中間・期末）の実施（年４回）
③　実力テスト（１，２年生１回、３年生４回）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

①立川町学校教育研究所所報「東光」により研究実践の概要や成果課題を掲載
②実践事例報告書（Ａ４版７枚）立川町内各小・中学校全教職員と教育委員会職員へ配布
③ホームページで発信 ☹(http://www.inetshonai.or.jp/~tachichu/homepage/index.htm)

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
■７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　■ 少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□ その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　■数学　□ 理科
■ 外国語　□ 音楽　□美術　□ 技術・家庭
□ 保健体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無